

『詩經』「寧風」詩考

福本郁子

(一)

殷代に於いて風が祭祀の對象であつたことが知られるようになったのは、ある一連の契文の發見からである。胡厚宣によつて發見され、更に様々な研究者によつて缺損部分の補修、補完が行われ、整理されたその契文は以下の通りである。⁽¹⁾

貞、帝于西方曰彝、風曰糝、稔年。(合集一四二九五)

辛亥卜内貞、帝于北方曰疋、風曰段、稔年。(合集一四二九五)

辛亥卜内貞、帝于南方曰長、風尸、稔年。(合集一四二九五)

貞、帝于東方曰析、風曰劓、稔年。(合集一四二九五)

胡厚宣以來、殆どの研究者は契文を右の如く斷句し、「風曰糝(風を糝と曰ふ)」「風曰段(風を段と曰ふ)」「風尸(風は尸)」「風曰劓(風を劓と曰ふ)」とあることから、「糝」「段」「尸」「劓」は風名であると解されてきた。

その後、赤塚忠が當該契文の斷句の誤りを指摘し、以下の如く改めた。

貞、帝于西方、曰彝風、曰糝、稔年。(合集一四二九五)

辛亥卜内貞、帝于北方、曰𠄎風、曰𠄎、𠄎年。(合集一四二九五)

辛亥卜内貞、帝于南方、曰長風、曰尸、𠄎年。(合集一四二九五)

貞、帝于東方、曰析風、曰𠄎、𠄎年。(合集一四二九五)

この斷句による契文の新しい解釋によると、「彝風」「𠄎風」「長風」「析風」が四方風にそれぞれつけられた稱謂であり、また「𠄎」「𠄎」「尸」「𠄎」については、風名ではなく地名ということになる。

さてこの契文で注目すべき部分は、(一) 四方に對して「帝于西方(西方に帝し)」「帝于北方(北方に帝し)」「帝于南方(南方に帝し)」「帝于東方(東方に帝し)」と、「帝(≡禘)」祭が行われていること、(二) 四方の風に對して「曰彝風(彝風に曰し)」「曰𠄎風(𠄎風に曰し)」「曰長風(長風に曰し)」「曰析風(析風に曰し)」と、「曰」祭が行われていること、そして(三) 各辭末に「𠄎年(≡年を𠄎らんか)」とある如く、これら「帝」「曰」の儀禮が、その年の穀物の稔りを祈願する爲に行われたということである。

四方に對して行われている「帝」祭は、他の辭例には「帝風九犬」(合集二一〇八〇)、「辛未卜、帝風不用雨」(合集三四一五〇)(屯二一六一)とある如く、風に對しても行われている。即ち風は「帝」や「曰」の儀禮によつて祀られ、穀物の豊饒が祈願されるべき對象であつたことがわかる。風は雲を呼び、雨をもたらし、穀物の順調な生育を促す。降雨と密接な関係がある風は、季節の流れに伴つて適切な方角から吹くことが希求されたのである。そしてその儀禮は他の農耕儀禮と同様、農耕が始まる季節に定期的に行われていたものと推測される。

一方で風は「孚(≡寧)」の儀禮によつても祀られていた。

癸未卜、其孚風于方有雨。(合集三〇二六〇)

癸酉卜、巫孚風。(合集三三〇七七)

癸亥卜、于南孚風豕一。(合集三四一五一)

乙丑貞、孚風于伊夷。(合集三四一五一)

「孚(＝寧)」は于省吾が「按、卜辭有孚風・孚雨・孚水・孚疾・孚龜之祭、謂風・雨・水・疾・龜爲害、祈禳於神祇以求其止息。龜、當指蝗」と解する如く、風や雨等による災害や、蝗等の害蟲による被害を鎮める爲の儀禮である。つまり「寧風」とは暴風を鎮める爲に行われる儀禮であつた。それは例えば、「辛未卜王貞、今辛未、大風不惟田」(合集二一〇一九)と、大風が「田(＝たたり)」をもたらずか否かを問う辭例があることや、また「不遘大風」「其遘大風」と、大風に遘あうか否かを問う辭例が頻出していることからわかる通り、日常生活を脅かす規模の暴風が吹くことが多かつた爲に、その被害を回避せねばならなかつたからに他ならない。附言するならば、「寧」字の使用される辭例中、「寧風」の用例が飛び抜けて多く、「寧雨」がこれに次いでいる。

以上の如く、殷代に於いて風は、年穀の豊饒を祈る目的で、定期的に禘や曰の儀禮によつて祀られ、また風害を避ける目的で、不定期に寧の儀禮によつて祀られていたことがわかる。人間にとつて風は、他の自然現象と同様、善と惡の兩義性を持ち、人々はその善の側面を長くとどめ、惡の側面による影響を忌避しようと、禘や曰の儀禮を行い、或いは寧の儀禮を行つたのである。自然現象のもつ兩義性とは、即ち自然神のもつ兩義性である。例えば水神は龍の姿で表象される場合が多いが、龍は聖獸としてその出現が吉祥とされる一方、畏怖や忌避の對象ともされた。それは水が萬物の源という善の側面と、河の氾濫などに伴う萬物を死に至らしめる惡の側面を、常に包括していたからである。

『詩經』の詩の中には、風を祀る行爲が背景に介在したと考えられる詩があり、その内容は風のもつ兩義性によつて二つに大別できる。即ち風の善の側面に依據しようとするものと、惡の側面による影響を忌避しようとするものである。換言すれば、「順風を求める(とどめる)」詩と「暴風を鎮める」詩である。殷代の風を祀る儀禮で言えば、「禘風」詩と「寧風」詩といふことになる。

本稿は邶風・終風篇、小雅・節南山之什・何人斯篇、同谷風之什・谷風篇の原義を解釋し、これまで暴虐な男性の比喩と

されてきた詩中の「風」が、文字通り「風」を指す語であり、これら三篇の詩が風や風の神を呼ぶ稱を呪物とする興詞を有し、その内容が所謂「寧風」詩に分類されることを明らかにするものである。

(11)

殷代に於いては、風は自らの意志で吹くのではなく、それを操る力を持つ者が別に想定されていた。嚴密に言うくと、「風を動かすことを命ずる者」と「風を直接動かす者」がそれぞれ想定されていたのである。前者は「帝（＝上帝）」であり、後者は「巫」である。この「巫」とは専門的職司としての人間の巫を指す場合と、それと同等の性格を投影した神靈を指す場合とがある。

「帝（＝上帝）」が風を命ずる者であることについては、契文に「貞、翌癸卯、帝其令風（貞ふ、翌癸卯に、帝、其れ風を令せんか）」（合集六七二正）とある通りで、風のみならず、雨や雷もまた上帝が命ずるものと考えられていたようである。⁷⁾

「巫」字の見える契文の中には、「帝巫（帝于巫）」「寧巫（寧風巫）」という語順の辭例群と、「巫帝」「巫寧」という語順の辭例群がある。前者は例えば、「…帝東巫（東巫に帝せんか）」（合集五六六二）「癸巳卜、其帝于巫（癸巳に卜す、其れ巫に帝せんか）」（合集三二〇一一）「癸亥貞、今日帝于巫牲一犬（癸亥に貞ふ、今日、巫に帝するに牲一犬にせんか）」（合集三四一五五）「辛酉卜、寧風巫九豕（辛酉に卜す、風を巫に寧むるに九豕にせんか）」（合集三四一三八）「戊子卜、寧風北巫犬（戊子に卜す、風を北巫に寧むるに犬にせんか）」（合集三四一四〇）の如く、「巫に帝す」「（風を）巫に寧む」と讀み、この場合の「巫」を赤塚忠は風を動かす力を持つ神靈の四巫であると述べる。また後者については「…巫帝一犬（…巫、帝するに一犬にせんか）」（合集二一〇七四）「庚…巫帝二犬（庚…巫、帝するに二犬にせんか）」（合集二一〇七六）「壬午卜、巫帝（壬午に卜す、巫、帝せんか）」（合集二一〇七八）「巫帝一犬一豕（巫、帝するに一犬一豕にせんか）」（合集

二一〇七八）「癸酉卜、巫寧風（癸酉に卜し、巫、風を寧めんか）」（合集三三〇七七）の如く、「巫、帝す」「巫、寧す」と読み、この場合の「巫」を赤塚は神靈の四巫を祀る専門的職司の人間に附せられた名稱であるとす。つまり赤塚によると、四方には四巫という神靈の存在が信ぜられ、この四巫が上帝の命を受けて風を動かすと考えられていたということになる。⁽⁵⁾

殷代に於ける風の祭祀には、四方から吹く風とは別に、それを操る四巫という神靈が想定され、更にそれを専門職として祀る人間の四巫が存在した。風は上帝の命によって四方から吹くが、そこにはそれぞれ風を動かす神靈が居り、これが「巫」と呼ばれた。そして人間界にはこの神靈を祀り、操る人間が居り、これもまた「巫」と呼ばれたのである。

殷代に於いて四方の彼方に想定されていた神靈の「巫」と、専門的職司として實在した「巫」の存在は、文献資料には殆ど伝わっていない。ただその嘗ての存在を示す痕跡が見える資料はいくつか残されている。例えば、『國語』には季節に伴って吹く風の到来を読む能力を持つ者が農耕儀禮に關わっていたことが記されている。周語上には「先時五日、誓告有協風至、王即齋宮、百官御事、各即其齋三日」と、「誓」が協風の到来を告げることが記されている。「誓」とは韋昭注に「樂太師、知風聲者也」とある如く盲人の樂官である。「先時五日」とは王の籍田の儀禮に先立つ立春の日の五日前のことを指している。この盲の樂官は春吹く風の到来を感覺的に読む能力を以て農事に關わっていることがわかる。この樂官の「風を読む」という性質は、殷代に於ける専門的職司の「巫」からくるものと推測される。周語上には他に「是日也、誓帥、音官以風土」ともあり、韋昭注に「音官、樂官。風土、以音律省土風、風氣和則土氣養也」とある如く、籍田の儀禮が行われる當日、「誓帥」が風を読む樂官として關わっている。また鄭語には「虞幕能聽協風、以成樂物生者也」と、「虞幕」という者がよく風を聴く能力を持つことが記されている。

『周禮』には風の神の名が祀る對象として記され、また風を鎮める職司の名も明記されている。春官・大宗伯に「大宗伯之職、掌建邦之天神、人鬼、地示之禮、以佐王建保邦國。以吉禮事邦國之鬼神示、以禮祀昊天上帝、以實柴祀日、月、星辰、以槨燎祀司中、司命、飊師、雨師、以血祭祭社稷、五祀、五獄、以豨沈祭山、林、川、澤、以騶辜祭四方百物」とある

は、「飄師^(九)」と呼ばれる風の神が熾燎^(一〇)によつて祀られていたことを記すものである。また春官・小祝に「小祝、掌小祭祀將事侯禴禱祠之祝號、以祈福祥、順豐年、逆時雨、寧風旱、彌裁兵、遠羣疾」とあるは、風や旱を寧める職司の存在を示すものである。更にここで「寧」字が風を鎮める意で使用されていることは、先の契文の辭例と全く同じである。

『山海經』大荒東經に「大荒之中、有山、名曰鞠陵于天、東極、離瞽。日月所出。名曰折丹。東方曰折、來風曰俊。處東極、以出入風」とあるは、殷代に於いて神靈の「巫」が想定されていたことの名残であると考えられる。「折丹」は郭璞注に「神人」とあり、郝懿行が「名曰折丹上疑脫有神二字。大荒南經、有神名曰因因乎、可證」と、「名曰折丹」の上に「有神」の二字を脱すると推測していることから推すに、「折丹」は神の名であると考えられるからである。日月の出る場所に「折丹」、また「折」と呼ばれる神人が居り、その風の出入を司るといふ性格は、契文に刻された神靈たる「巫」の性格と重なるものである。大荒北經には「有係昆之山者、有共工之臺。射者不敢北鄉。有人、衣青衣。名曰黃帝女魃。蚩尤作兵伐黃帝。黃帝乃令應龍攻之冀州之野。應龍畜水、蚩尤請風伯雨師、縱大風雨。黃帝乃下天女曰魃。雨止、遂殺蚩尤。魃不得復上、所居不雨。叔均言之帝、後置之赤水之北。叔均乃爲田祖。魃時亡之。所欲逐之者、令曰、神北行。先除水道、決通溝瀆」とあり、「魃」といふ神人が「風伯（＝風の神）」と「雨師（＝雨の神）」を操る力を持っていることが記されており、これも契文中に見える神靈たる「巫」を彷彿とさせる。そして地上に残された「魃」の去就に、農耕を司る神である「田祖」が大きく関わっていることから、「魃」自身も農耕に無關係の神ではなかったことが推測できる。

以上の如く、風にまつわる「神靈の巫」や「専門的職司の巫」の文獻上の痕跡はそれ程多くはない。では、風は四方のどのような場所から生ずると考えられていたのであろうか。契文にはそれを明確に示す辭例は見つかっていない。冒頭に擧げた一連の契文からは、風が東西南北から吹くことを示すのみである。少しく時代は下るが、『山海經』大荒南經には「有神、名曰因因乎。南方曰因乎夸風、曰乎民。處南極、以出入風」とあり、「南極」、即ち南の果てに風の出入する場所があることが記されている。また大荒西經には「有人、名曰石夷。來風曰章。處西北者、以司日月之短長」とあり、「西北者」、即ち西

北の果てに風の吹く場所があり、そこには日月の長短を司る神人がいることが記されている。これらの資料ではそれぞれの方角の「極」「隅」、つまり「果て」から風が吹くとされているようである。

ではこのような四方の「果て」には、どのような場所が想定されていたのであろうか。『尚書』堯典篇には以下の如く記されている。

乃命羲和、欽若昊天、曆象日月星辰、敬授民時。分命羲仲、宅嵎夷、曰暘谷。寅賓出日、平秩東作。日中、星鳥、以殷仲春。厥民析、鳥獸孳尾。申命羲叔、宅南交、〔曰明都。〕平秩南訛、敬致。日永、星火、以正仲夏。厥民因、鳥獸希革。分命和仲、宅西〔土〕、曰昧谷。寅饑納日、平秩西成。宵中、星虛、以殷仲秋。厥民夷、鳥獸氄毛。申命和叔、宅朔方、曰幽都。平在朔易。日短、星昴、以正仲冬。厥民隩、鳥獸氄毛。

ここでは東方には「暘谷」、西には「昧谷」、南には「明都」、北には「幽都」の名がそれぞれ配當されている。このうち「暘谷」「昧谷」の如く、その名に「谷」字が附されていることに注意したい。即ちこの「谷」字の附された稱謂は、本来四方にそれぞれ谷のような地形が想定されていたことの名残ではないかと考えられるのである。かく考える理由は『莊子』齊物論篇の記述にある。

子綦曰、夫大塊噫氣、其名爲風。是唯無作、作別萬竅怒呿。而獨不聞之蓼蓼乎。山林之畏佳、大木百圍之竅穴、似鼻、似口、似耳、似枅、似圈、似臼、似洼者、似汚者、激者、謫者、叱者、吸者、叫者、譟者、突者、咬者。

これは風の吹く時期が予測し難いことを、「夫大塊噫氣」と、大地（大塊）のおくび（噫氣）に喩えたものである。ここには風の生ずる場所として、方位等は記されていないが、風が「山林之畏佳」や「大木百圍之竅穴」から生ずると記されている點は留意すべきであろう。「畏佳」は、馬紱倫が「畏佳猶崔嵬。言山阜之高大也。倫按佳爲崔或隴之省。說文曰、崔、大高也。隴、隴隗、高也。嵬、嵬一。說文曰、嵬、山石崔嵬。高而不平也。此言畏佳（『莊子義證』）と、「畏佳」は「嵬崔」であると解している。「佳」を「崔」「隴」の省字とし、「畏」「嵬」「嵬」が假借關係にあるとする點は正しいのであるが、

「山阜之高大」とするは誤りであると思う。これは赤塚忠が「嶷崔の借字（王先謙説）、ただし、ここは嶷（山のくま）の緩言と解すべきである。つまり、山林の脈が灣曲して入り組んでいる所であつて、下の『似注者』に當たろう」と解しており、「嶷（＝山の隈）」の緩言と解するのが正しい。「畏」「嵬」に作るのは假借字で、本字は「嶷（＝嵬）」である。即ち「山林之畏佳」とは「山林が入り組んで隈になつた所」である。また後文の「大木百圍之藪穴」は、周圍が百圍もある大木にできた穴という意である。

如上の資料より推すに、本來、四方の果てには谷や洞穴や山の入り組んだ隈のような場所が想像されていたことが考えられる。その場所からは日や月が出入し、また風が出入すると信じられていたのである。

谷のような場所から風が吹くことは『山海經』にも見える。南山經には「又東四百里、至于旄山之尾。其南有谷、曰育遺。多怪鳥。凱風自是出」と、旄山の麓にある「育遺」という名の谷から「凱風」が吹くことが記されている。郭璞注には「凱風、南風」とあるが、「凱風」を南風と解するのは後述する如く誤りである。更に南山經には「又東四百里、曰令丘之山。無草木、多火。其南有谷焉。曰中谷。條風自是出」と、令丘の山の南にある「中谷」という名の谷から「條風」が吹くとある。ここでも郭璞注は「東北風爲條風」と、「東北」という方位を配當して「條風」を解釋するが、これが誤りであることについても後述する。

また『淮南子』覽冥篇には「鳳凰之翔至德也、雷霆不作、風雨不興、川谷不澹、草木不搖。……遷至其曾逝萬仞之上、翱翔四海之外、過崑崙之疏圃、飲砥柱之湍瀨、遭回蒙汜之渚、尙佯冀州之際、徑躡都廣、入日抑節、濯羽弱水、暮宿風穴」とあり、「風穴」が鳳凰の宿る場所とされている。この記述によると、鳳凰は至徳の君の不在によって、善にでも惡にでもなり得る存在であるが、留意すべき點は雷や風雨を司るものとして記されていることである。「風穴」は高誘注に「風穴、北方寒風從地出也」とあるによれば、北方の寒風が吹き出でる場所と解されるが、鳳凰が天帝の使者として天界と地上の間を行き來する存在であることと、既述の如く、嘗ては風が天帝の命によって地上に吹くものと考えられていたことを考え合

わせると、鳳凰自身が風を起こすところからの附名であったのだろう。或いは殷代に於いて、「風」字が「鳳」字を借りて刻されていたことに關連して生まれた俗信であったのかも知れない。いずれにせよ右の記述からは洞穴から風が生ずること乃至は洞穴に風を司る者の存在が信じられていたことをうかがい知ることができよう。

『詩經』の詩の中にも風の起こる場所が示されている句がある。それは小雅・谷風之什・谷風篇と、大雅・生民之什・卷阿篇、同蕩之什・桑柔篇である。

小雅・谷風之什・谷風篇には第三章の首二句に「習習谷風、維山崔嵬」とある。ここに見える「谷風」が文字通り谷から吹く風であることは、既に嚴粲や聞一多によって指摘されている。嚴粲は「自大谷之風、大風也。桑柔詩、大風有隧、有空大谷」(『詩緝』卷之四)と、大雅・蕩之什・桑柔篇の「大風有隧、有空大谷」を根據として、「谷風」を谷から吹く大風と解しており、更に聞一多は先の『莊子』『淮南子』『山海經』等の資料を引いて「嚴粲引錢氏曰、谷風、谷中之風也。案錢說是也。古人以爲竅穴井谷之類、爲風之所生」、また「谷風既爲起自山谷之風、自不當限於東風」(『詩經通義(甲)』)と、嚴粲説を是とし、「谷風」を東風と解する説を非とする。大風であることについては首肯できないが、谷から吹く風と解する點については、ここまで検討してきた通り疑う餘地はないものと思う。特に看過できないのが二句目に見える「崔嵬」の語である。既述の如く、この語は『莊子』齊物論篇に見える「畏佳」と同義で、嶮(山の隈)の緩言である。齊物論篇ではこの場所から風が生ずることが記されていたが、谷風篇に於いてこの場所が「習習谷風、維山崔嵬」と謠われたのは、谷風が山の隈から吹くことを示しているからに他ならないのである。

嚴粲が「谷風」解釋の根據に引く大雅・蕩之什・桑柔篇の當該句は第十二章の首二句に見える。ここに「大風」と「大谷」が併記されているということは、これらが無關係のものではないことを示していよう。「有隧」「有空」は、「有」字が形容語を作る助字であるので、「大風」と「大谷」をそれぞれ形容する語と解し得る。即ち桑柔篇の「大風有隧(大風隧たる有り)」と「有空大谷(空たる有り大谷)」の關係は、谷風篇の「習習谷風(習習たる谷風)」と「維山崔嵬(山の崔嵬に

維^あり)の關係と同じで、吹く風(「大風有隧」「習習谷風」と、それが生まれた場所(「有空大谷」「維山崔嵬」という構成を爲しているということになる。

大雅・生民之什・卷阿篇第一章首二句に見える「有卷者阿、飄風自南(卷たる有るは阿、飄風南よりす)」もまた同様に「飄風」と「阿」が併記されている。「阿」は、例えば衛風・考槃篇では「考槃在阿」と、川の曲がっている場所の意で用いられ、また『楚辭』山鬼篇では「若有人兮山之阿」と、山裾の曲がりくねった場所の意で用いられるが、段玉裁が『説文』阿字の項で「大雅有卷者阿、傳曰、卷、曲也。然則此阿謂曲自也」と言う如く、川や山に限らず、廣く曲がりくねった場所を指して使用する語である。ここでは曲がりくねって入り組んだ山の隈で、谷風篇の「崔嵬」と同義の語と解する。「有卷」は曲がる様を形容する語^(一八)。従つて當該句は、南方にある入り組んだ山の隈から飄風が吹いてくることを謠う句であることがわかる。

以上の如く、風は『詩經』の詩の中でも谷や山の入り組んだ所から吹くと謠われ、先に引用した他文献の記述ともいくつかの共通點が認められることがわかつたと思う。

『詩經』の詩に謠われる風は、從來、特に古い時代に於いては、四方の風にこじつけて解釋されてきた經緯がある。例えば邶風・凱風篇の「凱風」は、毛傳には「南風謂之凱風」と、南風であると解され、更に孔穎達は「南風謂之凱風、釋天文。李巡曰、南風長養萬物、萬物喜樂、故曰凱風。凱、樂也。傳以風性樂養萬物、又從南風而來、故云樂夏之長也」と、「凱」を樂の意に解して毛傳説を説明するが、何の根據も示されてはいない。その他、陳奐・王先謙・林義光・屈萬里・高亨・程俊英等が「凱風Ⅱ南風」説をとるものの、特に根據を示すものはない。凱風篇の「凱風」は、「凱風自南」と謠われるので、該句自體は風が南から吹いていることを示してはいるが、「凱風」の語自體が南風という譯ではないのである。そもそも「凱」字には、南や樂の意はない。「凱」は馬瑞辰や聞一多によつて指摘されている如く^(一九)、大の意であるので、「凱風」とは大風の意に解すべきなのである。

先の「谷風」は、擲風・谷風篇第一章にも「習習谷風、以陰以雨」と謠われており、毛傳がこれを「東風謂之谷風」と、東風と解している。以後、毛傳を踏襲する説が多く、孔穎達は「東風謂之谷風、釋天文也。孫炎曰、谷之言穀、穀、生也。谷風者、生長之風。陰陽不和、即風雨無節、故陰陽和乃谷風至。此喻夫婦、故取於生物」と、『爾雅』釋天に毛傳と同文があり、孫炎注の谷を穀の假借字とする説を引く。王先謙も「谷之言穀者、取同聲字爲訓。書堯典、宅西曰昧谷、縫人注作度西曰柳穀、莊子駢拇篇、臧與穀二人相與牧羊、崔譔本穀作谷、是谷、穀字通」と、同様の解釋である。谷が穀の同音假借字であること自體は誤りのないことではあるが、この發想の根底にもやはり、方位や季節などに無理にこじつけようとする傾向がうかがえる。假にこのように解釋するのであれば、桑柔篇に於いて「大風」が「大谷」と併記され、また谷風篇に於いて「谷風」が「崔嵬」と併記されることの理由をどう説明すればよいのであろうか。

先の『山海經』南山經に於いて郭璞が、「育遺」から吹く「凱風」を南風と解し、「中谷」から吹く「條風」を東北風と解する説も、これらと同様に「凱」字や「條」字が何故に南方や東北方を意味するかを論證しておらず、ただいづれかの方向を配當しようとしたに過ぎない。

確かに雨を運び雲を呼ぶ風は、穀物の生長を促す力を持つと信じられ、類感呪術的に女性の懷妊や多産をもたらす呪力をも持つと信じられてきた。しかしそれを「谷風(10)∥穀風∥東風∥春風」と、方位や季節を配當することによって説明するのは、後の陰陽五行思想に基づく解釋を取り込んでいる危険性が高く、これを是とすることは到底できないのである。

(三)

既述の如く風には、他の自然現象と同様、善と惡の二面性があり、古の人々は穀物の生長を促す順風を長くとどめようと風を祀り、また穀物の生長を阻害し、生活の安寧を脅かす暴風を速やかに鎮めようと風を祀ったのである。

『詩經』にはこの両方に起源を有すると考えられる詩が収録されており、特に前者に屬する詩は、歌垣詩（鄭風・摯兮篇^(三)）、結婚の祝頌詩（檜風・匪風篇^(三)）、懷妊を祈願する詩（邶風・凱風篇^(三)）、祖靈祭祀の直會に於いて一族の和合と繁榮を祈願する詩（大雅・生民之什・卷阿篇）等とその祈願の内容を多様に展開させているという特徴がある。これに對して後者に屬する詩、即ち暴風を鎮める詩は、一貫して謠い手の不遇、即ち暴風による被害を訴える内容に終始しているという特徴がある。風の善の側面に祈願する詩の多くが、實現の願わしい事柄を言葉にのせて謠っているのに對して、風の惡の側面による災害を回避しようとする詩は、先ず不幸な實狀を訴えて、被害を最小限に止めようとしている。そこには實現の願わしい具體的な事柄を謠う句などなく、ただ窮狀を訴えて生活の回復を願うことだけが祈願の目的となっている。謠い手ただ獨りが身を置いている不幸の如くに謠われる内容は、實は共同體全體の不幸に他ならない。そのような共同體全員の不幸の元凶である暴風を鎮めようとする詩が、以下に解釋を試みる邶風・終風篇、小雅・節南山之什・何人斯篇、同谷風之什・谷風篇である。いずれの詩も、興詞中に風や風の神を呼ぶ特殊な稱謂が呪物として使用されている。

先ず小雅・谷風之什・谷風篇から解釋を試みる。既述の如く、「谷風」は文字通り谷間から吹く風で、「崔嵬」は山林が入り組んで隈になった所、即ち谷間のことである。

小雅・谷風之什・谷風篇^(三四)

第一章 習習谷風、維風及雨。將恐將懼、維予與女。將安將樂、女轉棄予。

第二章 習習谷風、維風及頹。將恐將懼、寘予于懷。將安將樂、棄予如遺。

第三章 習習谷風、維山崔嵬。無艸不死、無木不萎。忘我大德、思我小怨。

（押韻 第一章 ○∥魚部韻。第二章 △∥微部韻。第三章 △∥微部韻、□∥元部韻：微元合韻）

〈語釋〉○「習習」は聞一多が「且習習亦本大風之聲」（『詩經通義（甲）』）と言う如く、大風の吹く音の擬音語。○「維風及雨」の「及」は裴學海が「及、與也」と言う如く與で、「……ト……ト」と讀む。下句の「維風及頹」の「及」も同じ。

○「將恐將懼」の「將た……將た……」は、同時進行の行爲を表す。「……し、かつ……す」の意。○「維予與女」の「予」はこの詩の謠い手である巫女の自稱。「女（＝汝）」は風の神を指して呼ぶ稱。○「頽」は聞一多が「頽讀爲遺、訓雷」（詩經通義（甲））と云う如く、雷の意。○「眞」は鄭玄が「眞、置也」と云う如く、置く意。○「遺」は集傳に「如遺、忘去而不復存省也」とある如く、忘れる意。○「維山崔嵬」の「維」は聞一多が「維猶在也」（詩經通義（甲））と、「在」であると解する。これによると該句は「山の崔嵬に維り」と讀める。「維」は裴學海が「惟、一爲在字之義。字通作維」とし、「在」と解し得ることから、聞一多説は妥當であろう。○「大德」の「德」は魏風・碩鼠篇「莫我肯德」を『呂覽』舉難篇が「莫我肯得」に作り、李富孫が「古德與得字通」（『春秋三傳異文釋』）とする如く、得に通ずる。大得とは、風の神から得た恩惠、具體的には豐饒や多産などの恩惠を指す。

各章首二句は毛傳、集傳ともに「興也」とする。既述の如く「谷風」を呪物とする興詞である。そしてその風は雨を伴い（「維風及雨」、雷を伴う（「維風及頽」）ものとして謠われているのであるが、それは人間に恐懼を抱かしめ（「將恐將懼」、すべての草木を枯らす（「無艸不死、無木不萎」）ほどの災害をもたらす存在であることがわかる。降雨があるにも関わらず草木が死に絶えるとは、その雨量が尋常ならざるものであることを示していよう。故に、この詩の謠い手である巫女が、風の神に一心に仕えて荒れ狂う暴風を鎮めようとする（「維予與女」「眞予于懷」「將安將樂」）のであるが、それも叶わぬ（「女轉棄予」「棄予如遺」）と嘆き悲しむ内容となっているのである。従って、この詩の各章首二句に謠われる風の興詞は、風の神を呼び招き、暴風雨による被害の酷さを訴えて風を鎮める目的で謠い込まれたものであることが理解される。

如上の語釋と興詞の解釋に従い、訓讀と日本語譯を以下に記す。

〈訓讀〉

第一章 習習たる谷風、維れ風と雨と。將た恐れ將た懼れ、維れ予女に與せん。將た安んじ將た樂しましめんとするも、女轉つて予を棄つるか。

第二章 習習たる谷風、維れ風と頽かみなりと。將た恐れ將た懼れ、予を懷ふとこころに實おけ。將た安んじ將た樂しましめんとするも、予を棄わすてて遺わするるが如し。

第三章 習習たる谷風、山の崔嵬あに維あり。艸として死せざるは無く、木として萎えざるは無し。我が大徳を忘れ、我が小怨を思はん。

〈日本語譯〉

第一章 ひゅうひゅうと谷から吹く風、風に雨も混じる。貴方を恐れ懼れつつ、私は貴方に（心の底から）仕えたいと願う。貴方を安んじ樂しませたいのに、貴方は却って私を棄て去ろうというのか。

第二章 ひゅうひゅうと谷から吹く風、風に雷も混じる。貴方を恐れ懼れつつ、私を貴方の懷ふとこころに入れて欲しいと願う。貴方を安んじ樂しませたいのに、貴方は私を棄ててもう忘れてしまったかのようにだ。

第三章 ひゅうひゅうと谷から吹く風、それは山の隈に宿るもの。草はことごとく死に果てて、木はことごとく枯れ果ててしまった。（このまま大風が止まぬなら）私は貴方にいただいた數多の恩を忘れ、身の内に巣くった小さな怨みを深くしてしまえうだ。

神を祀る詩の多くは、巫覡が神の來臨を冀う演出方法として、神と巫覡との神婚形式をとる。例えば、衛風・考槃篇は碩人（＝水神）と巫女との神婚形式をとった迎神詩である（一七）、また召南・艸蟲篇は君子（＝祖靈）と巫女との神婚形式をとった迎神詩である（一八）。その内容はあたかも女性が男性を戀うるが如くに謠われている。迎神詩が戀愛詩と誤解される所以である。神婚とは、神と人との交流を劇的に演出する手段の一つである。宗教詩の中でも迎神詩や送神詩が神婚という演出方法とて謠われることが多いのは、巫女という特異な存在の爲である（一九）。人が神を祀る場合、それが目に見えぬものであるが故に、神と人との媒介する者の存在が不可缺となる。それは聖と俗の中間に位置し、神と人との間を仲介する役割を擔うもので、必ず神に占有される存在でなくてはならない。

谷風篇があたかも暴虐な男性と虐げられる女性のことを謡っているかの如き内容であるのは、實はこれも神と巫女との交流を劇的に演出しようという意圖によるものである。つまりこの詩の謡われた背景には、考槃篇や艸蟲篇等と同様、神と巫女との神婚という發想が存在していたと見るべきなのである。

小雅・谷風之什・谷風篇は、風の神を來臨せしめ、暴風雨によつてもたらされた被害の甚大さを訴え、風の鎮まることを祈願する詩であることが理解されたと思う。

次に邶風・終風篇の解釋を試みる。

邶風・終風篇

第一章 終風且暴。顧我則笑。諢浪笑敖。中心是悼。

第二章 終風且霾。惠然肯來。莫往莫來。悠悠我思。

第三章 終風且噎。不日有噎。寤言不寐。願言則嚏。

第四章 噎噎其陰。虺虺其雷。寤言不寐。願言則懷。

(押韻 第一章 ○||藥部韻、◎||宵部韻：藥宵通韻。 第二章 △||之部韻。 第三章 ◆||質部韻。 第四章

▲||微部韻)

〈語釋〉○「終風」の「終」については王引之が「終字皆當訓爲既」(『經義述聞』)と云う。既(すで—)の意。○「暴」は林義光が「暴讀爲瀑。說文云、瀑、疾雨也」と云う如く瀑で、雨が激しく降る意。「あめはげ—」と讀む。○「顧我則笑」の「我」はこの詩の謠い手たる巫女の自稱。風を鎮める役割を擔う者である。巫女を顧みて笑うのは擬人化された風の神である。○「諢浪」は戯れふざける意。○「笑敖」は陳奐が「笑敖者、諢之狀也」と云う如く、ふざける様を形容する語。○「悼」は朱熹が「悼、傷也」と云う如く、傷つき傷む、悲しみ傷む意。○「霾」は毛傳に「霾、雨土也」とあり、程俊英が「霾、大風刮得塵土飛揚。古人稱爲雨土」と云う如く、土煙をあげて雨を降らせること。「つち—フル」と讀む。○「惠」

は集傳に「惠、順也」とあり、「然」は物事を形容する語を作る助字であるので、「惠然」は從順に従う様を形容する語。○「肯」は鄭玄が「肯、可也」と言い、また『助字辨略』に「爾雅云、可也。愚案、肯、願辭也。心誠願之、故爲可也」とある如く、願望を表す助字で、可（べし）と讀む。「惠然肯來」とは荒れ狂う風が止んで、穏やかな順風が來らんことを願う句。○「悠悠」は程俊英が「悠悠、形容思念之情綿綿不斷貌」と言う如く、強い思念を斷ち切ることができない様を形容する語。○「噎」は陳奐が「噎、亦陰也。釋名、噎、翳也。小爾雅、噎、冥也」と言う如く、陰り曇る意。○「不日」は聞一多が「不日、無定日也。君子于役、不日不月、與上章不知其期并列、亦謂無定期也」（『詩經通義（乙）』）と言う如く、時期の定まらぬことで、ふいに、時ならずしての意。○「有」は王引之が「有猶又也」（『經傳釋詞』）と言う如く、又（また）の意。○「言」は王引之が「言猶云也。語詞也」（『經傳釋詞』）と言う如く語助詞で、「ここ一」^二と讀む。○「噎」は馬瑞辰が「釋文本作韋者、從崔集注本也。釋文云、本又作嚏者、嚏卽噎字之俗、廣韻以嚏爲噎俗字、是也。釋文云、又作寔、劫也者、乃王肅本、孔疏引王肅云、寔、劫不行也、願以母道往加之、我則寔踏而不行、是也。說文、寔、礙不行也。从車、引而止之也。寔通作躓。……則此章當從王肅本作寔爲是」と、韋・嚏・噎（噎）は俗字で、寔が本字であるとするのが正しい。但し、寔を躓（つまずく）の意に解するのは誤り。馬瑞辰の引く『說文』をその後文とともに改めて引用すると、「寔、礙不行也。从車、引而止之也。車者、如車馬之鼻、从口、此與牽同意」とあり、もと手綱を牽いて馬をひきとめる意である。ここは風の神をひきとめて先へ行かせない意に解する。○「噎噎、陰貌」とある如く、空が曇る様。前章では曇りと晴れが繰り返される天候を諺っていたが、ここは眞つ暗に曇ることをいう。○「虺虺」は李雲光が「案虺虺、聲也。狀疾雷奮擊之聲。以字音爲義」と言う如く、雷が激しく鳴る音の擬音語。○「懷」は鄭玄が「懷、安也」と言う如く、安んずる意。「願言則懷」とは、風の神が巫女のもとに安らうことを願う句。それは風の神が祀りを受け入れ、暴風を鎮めて欲しいという巫女の願いが聞き入れられることを指す。

各章首二句は、毛傳が「興也」とし、これを鄭箋が「興者、喻州吁之爲不善、如終風之無休止、而其間又有甚惡悼者」と、

不善の行いを續ける公子州吁を、吹き止まぬ終風に喩えたものと解する。しかしこれが男性の比喩などではなく、風そのものを呪物とする興詞であることは、先の谷風篇と同じである。この詩の中の風も谷風篇同様、豪雨（「暴」「霾」）や雨雲（「噎」「噎噎其陰」）や雷鳴（「虺虺其雷」）を伴う、望ましからざる存在であることは明らかである。即ち終風篇に於いて風の興詞が使用される目的は、やはり風を鎮めることにあることが理解されよう。

では次に如上の語釋と興詞の解釋に従って訓讀と日本語譯を記す。

〈訓讀〉

第一章 終すでに風ふき且あめはげつ暴し。我を顧みて則ち笑ふ。諛浪せらるること笑敖たり、中心是れ悼いたむ。

第二章 終に風ふき且つちつ霾くもふる。惠然として來たる肯べし。往く莫く來たる莫く、悠悠として我思ふ。

第三章 終に風ふき且またつ噎くもり、日ならずして有噎またる。寤さめて言ことに寐いねられず、願ねがはくは言ことに則ち噎ひたひためん。

第四章 噎くもとして其れ陰かげり、虺虺として其れ雷かみす。寤さめて言ことに寐いねられず、願ねがはくは言ことに則ち懷やんぜよ。

〈日本語譯〉

第一章 風は吹きすさび激しい雨を降らす。あの人（＝風の神）は私を振り返り見ては笑うだけ。あの人にもてあそばれるばかりで、私の心は傷つき傷む。

第二章 風は吹きすさび土煙をあげて雨を降らす。穏やかな風吹くことを願って止まぬ。行きつ戻りつして（風の神の來臨を待ち焦がれ）、斷ち切れぬ我が思い。

第三章 風吹きすさび空かき曇り、（晴れたと思えば）ふいにまた曇る。（風の神の來臨を待ち焦がれて）目覺めては寢もやらぬ、我がもとに（風の神を）ひきとめたいと願う。

第四章 雲は黒く垂れ込めて、雷鳴は響き渡る。（風の神の來臨を待ち焦がれて）目覺めては寢もやらぬ、（風の神よ）どうか我がもとに安んじ給え。

終風篇の詩意について毛序は「終風、衛莊姜傷己也。遭州吁之暴、見侮慢、而不能正也」と、衛の莊姜が公子州吁に亂暴な扱いを受けたことを傷む詩と解し、朱熹は「莊公之爲人、狂蕩暴疾、莊姜蓋不忍斥言之。故但以終風且暴爲比」と、州吁ではなく莊公が莊姜に對して行つた暴慢な行いを風に喩えたと解する。以後、長くこの詩は女が男に暴虐な扱いを受けたことを暴風に喩えたものと解釋され續けてきた。唯一、赤塚忠のみがこの詩を「風を祭る詩」^(二九)であるとして、殷代の風祭りを繼承したものであることを指摘する。但し、残念ながら終風篇の詳しい解釋は残されていない。

従来の終風篇の解釋が、亂暴な男性を暴風に喩えたとするのは、原義を解釋する側から見ると實は逆で、狂暴に吹き荒ぶ風が擬人化されて、あたかも人間の男が女に暴虐をはたらいたかの如くに表現されたに過ぎないのである。これは風を鎮める内容を謠う詩全體に共通することでもある。

擬人化された風に對して、一心に仕えようとする巫女は「中心是悼」「莫往莫來、悠悠我思」「寤言不寐」と、ただ悩み憂えるばかりである。巫女の願いは唯一つ、暴風が鎮まつて順風の來たることである。それを「惠然肯來（惠然として來たる肯し）」と謠っているのである。更に第三、四章にて「願言則嚏」「願言則懷」と謠うことで、我がもとに來臨し、その祀りを受け入れられんことを祈り、風の鎮まることを祈願する内容となっている。

また第三、四章に見える「寤言不寐」とは、風の神の來臨を待ち焦がれる巫女が、その思いの切なるが爲に、眠ることもままならぬを謠う句である。ちょうど周南・關雎篇の「求之不得、寤寐思服、悠哉悠哉、輾轉反側」を彷彿とさせる句であるが、このように神の來たるを待ち侘びる巫女の所作が、人間の男の來たるを戀うる女の所作を借りて演出されていることは、既述の如く迎神儀禮を劇的に演出しようという意圖によるものである。

最後に小雅・節南山之什・何人斯篇の解釋を試みる。紙數の都合で語釋は割愛する。

小雅・節南山之什・何人斯篇^(三〇)

第一章 彼何人斯、其心孔艱。胡逝我梁、不入我門。伊誰云從、維暴之云。

第二章 二人從行、誰爲此禍。胡逝我梁、不入唁我。始者不如今、云不我可。

第三章 彼何人斯、胡逝我陳。我聞其聲、不見其身。不愧于人、不畏于天。

第四章 彼何人斯、其爲飄風。胡不自北、胡不自南。胡逝我梁、祇攬我心。

第五章 爾之安行、亦不違舍。爾之亟行、遑脂爾車。壹者之來、云何其盱。

第六章 爾還而入、我心易也。還而不入、否難知也。壹者之來、俾我祇也。

第七章 伯氏吹壘、仲氏吹篴。及爾如貫、諒不我知。出此三物、以詛爾斯。

第八章 爲鬼爲蜮、則不可得。有靦面目、視人罔極。作此好歌、以極反側。

(押韻 第一章 ○||文部韻。 第二章 △||歌部韻。 第三章 □||眞部韻。 第四章 ◎||侵部韻。 第五章

●||魚部韻。 第六章 ▽||錫部韻、▲||支部韻：錫支通韻。 第七章 ▲||支部韻。 第八章 ◆||職部韻)

〈訓讀〉

第一章 彼は何人ぞ、其の心孔だ難し。胡ぞ我が梁に逝ぶも、我が門に入らざる。伊れ誰にか云に従はん、維り暴の之のみならん。

第二章 二人從ひ行かんとするも、誰か此の禍を爲せり。胡ぞ我が梁に逝ぶも、入りて我を唁はざる。始めは今の如くならざるも、云に我を可せず。

第三章 彼は何人ぞ、胡ぞ我が陳に逝ぶ。我其の聲を聞くも、其の身を見ず。人に愧ぢず、天を畏れず。

第四章 彼は何人ぞ、其れ飄風爲り。胡ぞ北よりせざる、胡ぞ南よりせざる。胡ぞ我が梁に逝びて、祇だ我が心を攬す。

第五章 爾の安行するも、亦舍ふに違あらず。爾の亟行するも、爾の車に脂さすに違あらんや。壹は之れ來たるに、云に何ぞ其れ盱する。

第六章 爾還りて入らば、我が心易ばん。還りて入らずんば、否だ知り難し。壹は之れ來たるに、我をして祇ましむ。

第七章 伯氏壘を吹き、仲氏篋を吹くがごとし。爾と貫の如くなるも、諒に我を知らず。此の三物を出し、以て爾に詛ふ。
第八章 鬼の爲く、蠺の爲く、則ち得べからざるも、靦たる有り面目もて、人に視すに極まる罔し。此の好歌を作り、以て反側を極めん。

〈日本語譯〉

第一章 あの人は誰だろう、その人の心を讀むのはとても難しい。何故貴方は私と懇ろになつても、私の家を訪れようとしないのか（＝私と正式に婚禮を挙げようとしませんか）。私は誰に従つたらよいのか、それはひとりあの亂暴な人（＝暴風を起こしている風の神）しかないのだ。

第二章 あなたと二人寄り添つて行こうとしているのに、一體誰がこんな禍を起こしたのか。何故貴方は私と懇ろになつても、我が家を訪れて私の名をたずね（て婚禮を挙げ）ようとしませんか。昔はこんなふうではなかつたのに、（今では）もう私を愛してはくれぬ。

第三章 あの人は誰だろう、何故貴方は（結婚の意思もないのに）私と懇ろになろうとするのか。私は貴方の聲を聞いたが、そのお姿をまだ見たことがない。人にも恥じず、天をも恐れぬその振る舞い。

第四章 あの人は誰だろう、それは暴風（を起こす神）である。（その風は）何故北（時節に適つた方角）から吹かぬのか、何故南（時節に適つた方角）から吹かぬのか。何故貴方は私を弄んでは、いたずらに私の心を亂してばかりいるのか。

第五章 貴方はゆっくり行く時さえ、休む暇などないと言う。まして急いで行く時に、車輪に脂さす暇などあろうはずもないのに。昔はここに來てくれたのに、今では何故わざと回り道などするのか。

第六章 貴方がここに歸つてきてくれるなら、私は心穩やかになるだろう。貴方がここに歸つてきてくれぬから、その心の内がわからぬのだ。昔はここに來てくれたのに、今では私を悩ませるばかりだ。

第七章 兄が土笛を吹き、弟が竹笛を吹き和するように仲睦まじかった私たち。貴方と私は貫かれて離れない二つの貝のように情を通じていたのに、貴方は本當は私のことをわかつてはくれなかった。私は生贄を供え、貴方に生涯仕えんことを誓う。

第八章 鬼神のように水神のように、この目で見ることのかなわぬ貴方は、自分勝手に振る舞って私にひどい仕打ちをする。だからこの善き歌を作つて（謠い、善き言靈の呪力をかりて）、不誠實さを責め（て、暴風の鎮まらんことを祈）るのだ。

第一章首句の「彼何人斯（あの人は誰か）」は、擬人化した風の神を指して呼ぶ稱である。「あの人」と、呼ぶ対象を明確に言わないのは神の名を直接呼ぶことを忌避したものであり、陳風・澤陂篇の「美一人」や秦風・蒹葭篇の「所謂伊人」と同じである。^(三) 即ち「彼何人斯、其心孔艱」は、風の神を祭祀の対象として謠い込んだ興詞ということになる。第三、四章の首二句も同種の興詞である。

「彼何人斯」が風の神を指す稱謂であることの根拠はいくつかある。一つは第三章の「我聞其聲、不見其身」である。これは、風音は聞こえるが姿は見えぬをいう句で、人間の側から見た風そのものを表したものである。それは第八章に「爲鬼爲蜮、則不可得」とあることから明らかである。該句の「得」は下に「見」字を補つて讀むべきで、風の神は鬼神や水神と同じように目で見ることができぬと謠っているからである。神が目に見えぬことは、大雅・文王之什・文王篇にも「上天之載、無聲無臭」と謠われている如くである。また前句に「胡逝我梁」とあるは、後述する如く謠い手とその相手とが既に閨を共にしていることを示すものであるが、そのような関係にあるにも関わらず、相手の姿を見ていないというのは、それが風の神であるからに他ならない。更にこの詩の謠い手も他の二篇の詩と同様、風の神に仕える巫女であるので、この二人が閨を共にするという表現が、巫女が風の神を迎え祀る行爲を、神と巫女との神聖な結婚という形で象徴的に演出したものであることは、既に述べた通りである。

「彼何人斯」が風の神を指す稱であることの二つ目の根據は、第四章に見える「彼何人斯、其爲飄風。胡不自北、胡不自南」の句である。「彼何人斯（あの人は誰か）」と自問した後に「其爲飄風（それは暴風三四を起す神である）」とその正體を直接的に述べ、更に「胡不自北、胡不自南（何故北から吹かぬのか、何故南から吹かぬのか）」と、季節に適った順風が吹かぬことを責めているのである。穀物が順調に生長する爲には、季節毎の風が正しく吹くことが不可欠だからである。

三つ目の根據は、第七章の「出此三物、以詛爾斯」である。「三物」とは毛傳に據ると豕・犬・鶏の生贄のことである。この句が風の神に生贄を供して、專一に仕え祀ることを誓う句であることについては、説明を要しないであろう。

如上の三點から見ても、首句「彼何人斯」が風の神を指す句であることは大過ないものと考えられる。第一章首二句は、風の神を指す稱謂を呪物とする興詞であることは明らかであろう。第三・四章の首二句も同様である。

この詩の解釋を難解にしているのは、二つの隱喩表現であろう。一つは第一・二・三・四章に見える「胡逝我梁」「胡逝我陳」という表現であり、今一つは第一・二・三章に見える「不入我門」「不入唁我」という表現である。

「胡逝我梁」の「梁」は、邶風・谷風篇、齊風・敝笱篇、小雅・節南山之什・小弁篇の三篇の詩には「笱」字とともに使用されており、邶風・谷風篇の集傳に「梁堰石障水而空其中、以通魚之往來者也。笱以竹爲器、而承梁之空、以取魚者也」とあることから、「梁」は石で水を堰き止めたもの、「笱」は梁に仕掛けて魚を捕らえる道具で、通常、兩者は一緒に使用するものである。更に馬瑞辰が「衛風傳云、石絕水曰梁。周官、敝人掌以時獻爲梁、鄭司農注、梁、水堰。堰水而爲關空、以笱承其空。是梁與笱相爲用、故詩言逝梁、卽言發笱」と言う如く、詩中に「逝梁（梁に逝おとぶ）」と言えば、「發笱（笱を發ひいて魚を捕る）」ことを意味するので、何人斯篇の場合も「笱」字は使用されていないが、「逝我梁（我が梁に逝おとぶ）」と言うことで、笱を發いて魚を捕ることを暗示していると見るべきであろう。

『詩經』の詩に於いて「笱」とは聞一多が「詩人屢次講到捕魚的笱、實在不是指笱的本身、是隱喩女陰的」（『詩經的性欲觀』）と言う如く、女陰の隱喩である。魚を中に入れる形状であることが、女性が胎内に子を孕むことを連想させ、廣く女

性の生殖器を象徴する語として詩中に使用されたものと推測し得る。即ち「逝我梁」とは男性が女性に同衾を迫ることを意味し、「胡逝我梁」はどうしてそのようなことをするのかと、女性が男性を責める句と解される。^(三五)

「胡逝我梁」「胡逝我陳」が不埒な男の行爲を責める句であるに對し、「不入我門」「不入唁我」は、女が男に正式な婚姻關係を求める句である。「唁」は王念孫が「唁、亦問也。唁言古同聲」(『廣雅疏證』釋詁二)と言う如く、言、問の意で、禮に於ける問名の儀を指すと解される。『儀禮』士昏禮に據れば「問名」では、新郎側からの使者が新婦の姓名や生年月日を尋ねる。本篇の「唁我(名)」は、恐らくそのような儀禮を背景としており、婚禮を象徴する表現として使用されたものと考えられる。ならば「入我門」も同様の儀禮を背景としたものと類推し得、問名の爲に男が女の家を訪れることを指すものと解し得る。「不入我門」「不入唁我」は、男が女の家を訪れようとせず、女の名を尋ねようもしないという意で、正式な婚姻關係を結ぼうとしない不誠実な男の態度をなじる句であることがわかる。

かかる二種類の相反する内容を暗示する表現によって、肉體的な關係を求める男と、正式な婚姻關係を求める女の存在が浮き彫りとなる。即ち望むものが互いに食い違ふ男女を演出することで、謠い手である巫女にとって望みの叶えられていない實狀と、強い希求の念を表そうとしたものであることが理解されるのである。

以上により、何人斯篇は風の神を祀つて暴風を鎮め、時節に適つた順風が吹くことを祈願する詩であることが理解されたとと思う。

(四)

風は四方の果てより吹くものと古の人は信じていた。その四方の果てには、人間にとつて不可視で曖昧な空間が想定され、それはやがて谷間や、洞穴や、山の隈のような具體的な場所となつて神話や文獻上に現われることとなつた。此方から彼方

を見るのが難しい場所や、此方でも彼方でもない曖昧な空間に古の人は神の存在を信じ、人智では計り知れない神の出現をこの空間に求めたのである。風が生まれるとされたそのような場所は、『詩經』の詩の中にも僅かに名残をとどめた。それが「谷」や「崔嵬」や「阿」の語である。

他の自然神と同様、風の神にも両義性があり、その善の側面に人々は穀物の豊饒や女性の多産や一族の繁榮を祈り、順風の長く吹くことを願った。また悪の側面に對しては、眼前の現状を劇的に訴え、嘆くことで、穀物の生長を阻害し、生活の安寧を脅かす暴風を速やかに鎮めることを祈ったのである。かかる内容の詩を、本稿では殷代の祭祀の名を借りて寧風詩とし、これに類する詩として邶風・終風篇、小雅・谷風之什・谷風篇、同節南山之什・何人斯篇の三篇の詩の原義を解釋した。

註

- (一) 現在、『甲骨文合集』（姚孝遂『殷墟甲骨刻辭類纂』（中華書局 一九八九年）所收）に收録されている當該契文の缺損部分が順次補われていった経緯については、魏慈徳『中國古代風神崇拜』（出土思想文物與文獻研究叢書（八）、臺灣古籍出版有限公司 二〇〇二年）五三〜六〇頁に詳しい。
- (二) 赤塚忠が「風」字の下に「曰」字を脱したものと解する（『中國古代の宗教と文化』（角川書店 昭和五二年）四一八頁）に従った。
- (三) 註（一）赤塚忠前掲書四一五〜四二三頁。
- (四) 「帝」は禘祭の意。契文では「米」「粟」と刻される如く、「帝」字は神靈が憑依する依代を象つたものである。従つて禘祭とは、この依代に神靈を依り憑かせる儀禮を指すと考えられる。
- (五) 「曰」は赤塚忠によると「口説をもつて祈る意」（註（一）前掲書四一七頁）である。
- (六) 『甲骨文字詁林』（中華書局 一九九六年）「孚」字條、二六六二頁。
- (七) 例えば上帝が雨を命ずる辭例は「貞、今一月、帝令雨」（合集四一三二正）、「貞、帝弗其及今四月令雨」（合集一四一三三）などであり、雷を命ずる辭例は「貞、帝其及今三月令雷」（合集一四二二七正）などである。このうち雨を命ずる辭例が最も多い。
- (八) 註（一）赤塚忠前掲書四二九〜四三九頁。
- (九) 「飄」は孫詒讓が「飄師者、九經字樣蟲部云、飄、古文風」と言う如く風字の古字であり、「飄師」とは風の神を呼ぶ稱謂であつたと考えられる。
- (一〇) 「櫛燎」は『說文』に「櫛、積木燎之也」とあり、木を積んで焼く祀りのこと。
- (一一) 『尚書正義』に引く鄭注に「夏不言曰明都、三字摩滅也」とあるに従い、「曰明都」の三文字を補った。
- (一二) 「大塊」は兪樾が「大塊者、地也。塊、乃由之或體」（『諸子平議』）と解する如く、大地の意。
- (一三) 『莊子』上（全釋漢文大系第一六卷、集英社 昭和四九年）六七頁。
- (一四) 屈萬里が「按、詩中凡以有字冠於形容詞或副詞之上者、等於加然字於形容詞或副詞之下、故有貞猶貞然也」（『詩經註釋』周南・桃夭篇）と解するに従った。
- (一五) 但し、「有隧」の「隧」字については、馬瑞辰が「南山經、旄山之尾、其南有谷、曰育遺、凱風自是出。育遺一作育隧、據下云凱風所出、則育隧者、蓋以其風生此隧而名之與」と推測している。先の『山海經』南山經の「育遺」を郭璞が「或曰隧、凱風、南風」と解する如く、「育隧」にも作ることから、「隧」と

は本来、風の生ずる場所を指し示す稱謂であった可能性もある。しばらく「有隧」は風の吹く様を形容する語と解しておく。

(二六) 拙著『詩經』興詞研究(研文出版 二〇一二年) 二七頁、五八八頁を参照。

(二七) 王逸注に「阿、曲隅也」とある。

(二八) 「卷」は陳奐が「説文、卷、郗曲也。是卷有曲義。卷阿、曲阿也」と解する如く、曲がる意。上の「有」は既述の如く、形容語を作る助字。

(二九) 馬瑞辰は「説文無凱字、古止作豈、後乃作凱、又作颺、見玉篇。豈有樂義、故傳云樂夏之長養。據夏小正時有俊風、傳云俊者、大也。大風、南風也。淮南子天文訓、史記律書皆曰南方曰景風、景者大也。呂氏春秋有始篇、淮南子墜形訓、南方曰巨風、巨亦大也。則凱之義本爲大、故廣雅云、凱、大也」(『毛詩傳箋通釋』)と解し、聞一多は「豈聲字多有大意。呂氏春秋不屈篇曰、凱者大也。説文曰、凱、大鏃也。廣雅釋詁一曰、凱、大也。……凱風者、大風也」(『詩經通義(甲)』)と解している。

(二〇) 例えば、赤塚忠は「谷風」を東風とし、春さきに吹く風と解する。『詩經研究』(赤塚忠著作集第五卷、研文社 昭和六一年) 八一〜八二頁。

(二一) 鄭風・摯兮篇の詩意については註(二六)前掲書三五五頁を参照。

(二二) 檜風・匪風篇の詳しい解釋については註(二六)前掲書六〇〇〜六〇三頁を参照。

(二三) 邶風・凱風篇の詳しい解釋については註(二六)前掲書二〇三〜二〇六頁を参照。

(二四) 小雅・谷風之什・谷風篇の詩意については毛序が「谷風、刺幽王也。天下俗薄、朋友道絶焉」、朱熹が「此朋友相怨之詩」と言う如く、古くは朋友の道が絶たれたことを刺す詩と解されてきた。その後、棄婦の嘆きを諷した詩と解する説が一般的となる。本篇を風の神を祀る詩と解釋するのは赤塚忠だけであるが、赤塚は「東風を祭る歌。……「谷風」は、東風、春さきに吹く風である。それを擬人化して「女」といい、女性がそれに嘆きを訴えて風を宥和する形をとっている。天候の異變に對しては、こういう表現形式がとられるのであつて、これを詛歌という」(『詩經研究』(赤塚忠著作集第五卷、研文社 昭和六一年) 八一〜八二頁)と、眞に示唆に富む意見を述べているが、既述の如く「谷風」を東風と解する點については首肯し難い。

(二五) 衛風・考槃篇の詳しい解釋については註(二六)前掲書二四〜二九頁を参照。

(二六) 召南・艸蟲篇の詳しい解釋については註(二六)前掲書三〇九〜三二七頁を参照。

(二七) 神婚については註(二六)前掲書三一四〜三一六頁を参照。

(二八) 註(二二)赤塚忠前掲書四四〇頁。

(二九) 註(二〇)赤塚忠前掲書八二頁。

(三〇) この詩を毛序は「何人斯、蘇公刺暴公也。暴公爲王卿士、而譖蘇公焉。故蘇公作是詩、以絶之、朱熹は「此詩與上篇文意相似。疑出一手。但上篇先刺聽者。此篇專責譏人耳」と解する。

(三一) 陳風・澤陂篇の「美一人」や秦風・兼葭篇の「所謂伊人」が神の名を直接呼ぶことを避けた稱謂であることについては、註(二六)前掲書二頁、八七頁を参照。

(三二) 屈萬里が「得、謂得見也」と「得」下に「見」字を補つて解釋するのに従う。

(三三) 「爲鬼爲賊」の「爲」は王引之が「家大人曰、爲猶如也。假設之詞也」(『經傳釋詞』)と解する如く、「如」であるが、王引之がこれを「もーシ」と訓ずる假定文を作る助字に解する點は首肯し難い。『經詞衍釋』に「爲字竝訓假如之如。又訓如似之如。……爲訓曰如。如之義同比」とあるに従い、「ごーシ」と訓ずる。

(三四) 「飄風」は毛傳に「飄風、暴起之風」とある如く、激しく吹きすさぶ風、暴風の意と解する。

(三五) 「胡逝我梁、不入我門」の二句を聞一多は二句瘦語、禁夫勿來就己身也(『風詩類鈔』)と、同衾を迫る夫を拒絶する句であると解する。またこれと同一構文の「胡逝我陳」の句も、同様の隱喻を含む句であつたと思われるが、「陳」字に「梁」の如き意を表す用例が見つからなかつた。恐らく韻を踏む爲に「陳」字を入れ換えたものと考えられるが、推測の域を出ない。しばらく「梁」と同義と解しておく。

※その他、語釋等に使用した『詩經』解釋の爲の工具書については、註(二六)前掲書の参考文献を参照。